

2016 徳島大学附属図書館読書週間企画

「第4回TOKUDA I川柳」表彰作品選考にあたって

選考委員会委員長・教養教育院教授

石川 榮作

平成25年度より企画実施している「TOKUDA I川柳」も今年度で第4回目となりました。「旅と本」というテーマで川柳を募集したところ、55点の応募があり、8人の審査委員により評価し、総合点の多い順に、上記のとおり表彰者を選考しました。

応募作品は毎年のようにいずれも傑作揃いで、最優秀賞と優秀賞と入選の差はまさに紙一重です。それらの作品について簡単にコメントを付け加えておきますので、これを参考にして次回もたくさんの傑作をお寄せいただければ幸いです。

まず最優秀賞には、6名の審査員より満点の評価を受けて、「情景に しおりはさんで 途中下車」が選考されました。今回のテーマは「旅と本」ですから、五・七・五の中に「旅と本」をイメージする言葉が必要不可欠ですが、この作品の中には読書そのものが心の旅であると捉えて、心が眺める本の情景と、旅路で実際に眺める景色とを楽しみ味わう様子が簡潔明瞭に表現されています。五・七・五の言葉の中に豊かな余韻を残していて、さまざまなイメージが浮かんでくるところが高く評価されたと思われま

す。優秀賞の一つ目「祖父の本 時代を超えた 音を聞く」は、祖父の残した本を読んで、祖父の想像した景色や音を現代の自分も感じる不思議な思いにとらわれたことを表現しており、同じ本が時代を超えて読まれ継がれているところに共感を覚えずにはられません。二つ目の「歌枕 昔を思い 辿る旅」は、古い歌に詠み込まれた名所の美しい景色に強く心を惹かれて、そこへ実際に旅してみたい気持ちが生き生きと表現されています。三つ目「気が付けば 旅のしおりは 紅葉の葉」は、紅葉の季節に旅をしていて、ふと気がつくと、ガイドブックに真っ赤な紅葉の葉が一枚はさまっていて、ためらわずにその名所に向かうさまが表現されています。四つ目「本の森 言の葉探し 巡る旅」は、本を読んで、その主人公とともに物語の世界を巡る旅の楽しさを表していて、読書そのものが旅であることを感じさせてくれます。最後の五つ目の「図書館は 旅する本の 泊まり宿」は、図書館の本が次々といろいろな人の手に渡って、その羽を休めるために巨大な宿の図書館に戻って来ると、その旅先でのよもやま話が聞こえてくるような気持ちを表現していて、そのおもしろい発想が高く評価されたと思われま

す。次に入選の一つ目「旅の空 母の手紙を さし挟む」は、親元から離れて暮らす日々の中で、懐かしい母の手紙をしおり代わりにお気に入りの本の中にさし挟むことを表現しています。二つ目「旅立ちに 連れゆく友は 草枕」は、旅には本が不可欠なものとして、お気に入りの夏目漱石『草枕』を携えて、旅先で名著に浸って、旅を楽しむ情景が浮かんできます。このような「草臥（くたび）れない」のんびりした旅を「たびたび」したいものです。しかし、現実には時間が騒々しく過ぎていく毎日で、そのような多忙な中で読書に解放

感を求める気持ちを表したのが、三つ目「抜けだそう 心だけでも 本の旅」です。四つ目「行間に まだ見ぬ世界 垣間見る」は、本の中に書かれている文書だけでなく、書かれていない部分も読むことで、想像の中で世界が広がり、より自由に本の世界を旅することができることを言い表しています。それでこそ高度な読書というものです。最後の五つ目の「帰路につき 土産の下敷き 旅のとも」は、旅先で読もうと思って持って行った本が、結局は、読まれることもなく、カバンの奥底で土産物の下敷きになっていることをユーモラスに表現していて、それが誰にでも経験のあることで、一個人の体験が客観化されているところがよいと思います。

以上のほかにも、一個人の体験が客観化されているうえに、滑稽さやユーモラスを感じさせる作品がありますが、賞の数にも限りがありますので、賞に漏れた人には、申し訳ないのですが、「しょうがありませんね」、次回また応募してみてください。五・七・五の中にそのときの気持ちを表現するのは、本当にむずかしいことですが、そのわずかばかりの言葉による表現の中に豊かな余韻が残っていて、それが客観化されている作品が高く評価されるようです。これらを参考に次回もたくさんの応募をお待ちしております。